

ついに念願の「JIM-NET ハウス(子どもサポートハウス)」ができる その全容が明らかに！新しい時代を迎えた JIM-NET

JIM-NET は、イラクの小児がん患者の包括的な支援の拠点として「子どもサポートハウス」を作ろうと呼びかけてまいりましたが、ついに2017年1月から一部オープンしました。現地アルビルでは、親しみを込めて「JIM-NET ハウス」と呼ばれており、今後は「JIM-NET ハウス」という呼称に統一したいと思います。現地を訪問した佐藤真紀 JIM-NET 事務局長が報告します。

★「JIM-NET ハウス」とは？

井下俊 JIM-NET 理事は、JIM-NET 発足当初から医師として活動にかかわってくれています。僕自身は医者ではないので、JIM-NET を作る前から「医学に踏み込むよりは、心理社会的なアプローチで行けばいいんじゃないか」というアドバイスを井下理事からもらっていました。

イラクの小児がんの病院を見て信じられなかったのは、狭い病室に患者が何人も押し込められ、母親がつききりで看護し、添い寝しているという現実でした。

父親はというと、遠方から来てホテルに泊まるお金もないので、病院の受付の床や、夏は庭で寝ているのです。家族の経済負担だけでなく、心理的な負担も半端ではないのは見て明らかでした。

日本には、マクドナルドやアフラックがお金を出して、患者の家族のための宿泊施設を病院の近くに作っています。似たようなものができるか、今までずっと考えていました。

★ IS の襲撃

2014年、IS(イスラム国)がイラクの一部を占領すると、大量の国内避難民が、イラク北部クルド自治政府内に逃げてきました。

モスルが陥落した時は JIM-NET の事務所の近くにもテントが張られ、避難民であふれていたのです。JIM-NET の事務所も避難所となり、医者や患者が寝泊まりしました。そのことで、警察に注意もされました。

ファルージャから逃れてきた末期がんのアイド君という男の子を泊めた時は、知り合いの医師に来てもらって、痛がる彼に痛



JIM-NET ハウスの宿泊施設。壁には、2009年に目のがんで亡くなったサブリーンの絵をあしらったポスターが飾られている。左から鎌田寛 JIM-NET 代表理事 パスラ事務所のイブラヒム 患者さんのお父さん、新人スタッフのアーデル。

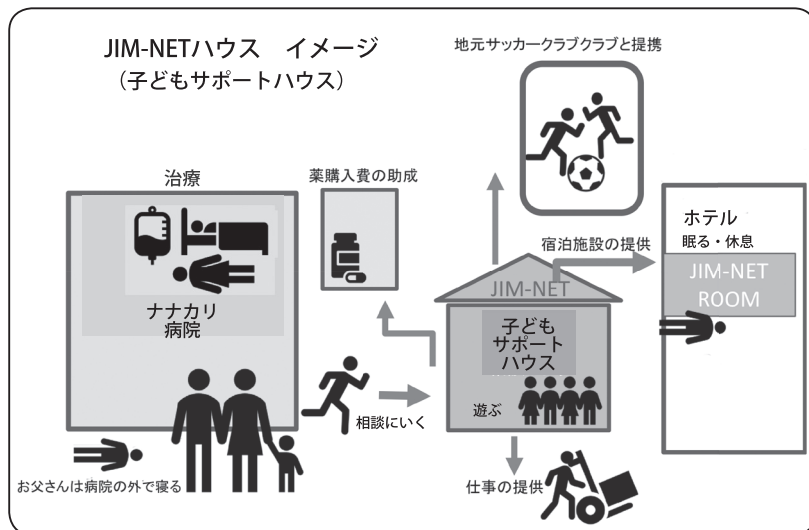
み止めを注射してもらったこともあります。結果的に、その子は亡くなりましたが、その時の経験から、「パリアティブケア(緩和療法)」がいかに大切かを考えるようになりました。

★日本政府の支援

2017年1月から一年間、外務省の日本 NGO 連携無償資金協力(N連)で、「JIM-NET ハウス」の活動費の一部をサポートしてもらえることになりました。正直、JIM-NET だけでは手に負えない事業です。小児がんの支援は国家レベルでの医療行政の改革と、NGO のチャリティに基づいた支援活動との両方で取り組まないと、追いつかないのです。

NEWS

- ついに念願の「JIM-NET ハウス(子どもサポートハウス)」ができる その全容が明らかに！ 佐藤真紀(JIM-NET 事務局長) 1
【ヨルダン事務所から】シリア難民・ヨルダン人障害者のエンパワーメント活動 福田直美(JIM-NET ヨルダン事務所長) 3
【イベント】元米兵×元自衛隊員×現 NGO スタッフ 聞きたかった戦争・紛争の「リアルな話」 4
「光を世界へ」2017 チョコ募金キックオフ チャリティトーク&コンサート/イラク・シリアの子どもたちへ バレンタイン展 5
【福島原発事故から6年】荒れ地に花をさす 鎌仲ひとみ(映像作家・JIM-NET 理事)
【シリア和平ネットワークワークショップ・シンポジウム「シリア危機への実効的アプローチに向けて」報告】
シリアに平和をもたらすために 内海旬子(JIM-NET 海外事業担当・アドボカシー担当) 7
鎌田代表のつぶやき『遊行』という生き方/新人あいさつ 齊藤亮平/募金グッズ新作登場 8



たとえば、薬がきちんと供給されない。これは行政の在庫管理に問題があります。医薬品の支援金額は、JIM-NETを始めた当初とほとんど変わっていないのが実情です。今から思えば、サダム政権崩壊後の新たな政権に、もっと日本などがきちんとした行政指導をすべきだったと思います。

がん治療は高額医療であり、受益者が少ないなどの理由で、日本政府は、なかなか支援をしてくれません。がんで死ぬのは当たり前ですが、飢死するのは当たり前ではないし、学校に行けないのも当たり前ではないから、どうしても食糧支援や教育支援が優先されるのです。

「難民がたくさん出ているのに、どうしてがんの支援をするんですか?」「どうせ高いお金をかけて治療しても、がんの子どもは死んでしまうんだから」と言われたらそれまでです。そのような不条理な援助のあり方を変えるために、何度か外務省と話し合い、そのあたりは理解してもらえたと思っています。

★モスルの奪還作戦がはじまった

2016年10月にモスルの奪還作戦が始まると、アルビルにあるナナカリ病院の患者の40%は、戦闘地区から避難してきたがんの子どもたちで埋め尽くされました。

サナット君（6歳）はナナカリ病院の構内に停められた救急車から、母親に手を引かれ降りてきました。靴やズボンはドロドロになっていました。

「いきなり、救急車はキャンプから患者を連れてきますが、ベッドが足りません。この子にはベッドがありません。仕方がないから今晩は別の患者と同じベッドで寝てもらいます」。ペイマン医師は苛立ちながら訴えます。「薬が足りません。モスルからこれだけの患者が来ているのに、中央政府からの薬は1%にすぎません」。患者は自分たちで薬を買わざるを得ないのですが、これが結構高額なので、JIM-NETがある程度薬代を援助しています。

サナット君は、モスルのハバルという村に住んでいましたが、2014年にISが自宅に押し入り、地元の民兵との間で激しい銃撃戦になってしまい、恐怖におびえました。その時から体調がおかしくなり、モスル内のイブン・アシール病院に行くと、白血病だと診断されました。

ISの戦闘員は、父親に「戦闘員になるのなら、薬を無償で提供する」と言いましたが、父親は拒否しました。長男は「弟が助

かるなら」とISで働くことを申し出ましたが、父親は怒り、長男を殴ってしまい、長男は意識をしばらく失っていたそうです。「夫と息子は、その時から仲が悪くなりました」。母親は涙を浮かべました。そして、ゴグジェリまで逃げて、そこからイブン・アシール病院に通うことになりました。イラク軍がゴグジェリを解放すると、イブン・アシール病院は、ISの傘下になっているので、サナット君はもはや病院に通うことができなくなりました。イラク軍の車に乗せられ、避難民キャンプに着いてから、救急車でナナカリ病院に連れてきてもらったとのことでした。

★ハウスを探す

サナット君のような患者を抱える家族が泊まれるような物件を探しましたが、モスルから来た人を泊めると聞くと、家主が難色を示しました。「ISに感化されているかもしれないと思うと、近所の人たちが怖がる」とのことでした。

そこで、病院の近くのホテルを一年契約で2部屋確保し、いつでも泊まれるような体制を作り、家族が相談に来る「JIM-NETハウス」も、ホテルのすぐそばに借りました。

宿泊施設はすぐに患者家族が利用し、満室が続いています。

★モスルに緊急支援を!

モスル解放作戦が続く中「イブン・アシール病院が連合軍の空爆を受けた」というニュースが報道されました。数名が犠牲になったようです。

読者の皆さんは、ISの病院と聞けば、野蛮な医者はどこからかやってきてろくな治療もせずに、患者を苦しめているようなイメージを持たれるでしょう。しかし、実際はそうではありませんでした。私の友人であるムハンマド医師は、日本で研修を受けたこともありました。ISが来たからといって、患者を見捨てて逃げるわけにはいかず、イブン・アシール病院に留まって子どもたちの治療を続けていたのです。

今年1月には、病院のある地域からもISは姿を消しました。そして、ISの戦闘員は、逃げる際に病院に火を放って逃げていったのです。現在イブン・アシール病院の復旧作業が行われています。

JIM-NETは、モスルからナナカリ病院に来る患者さんの宿泊場所などを提供していますが、やはり彼らがモスルできちんと治療を受けられるようにしないと、精神的、経済的な負担は軽減されません。

ムハンマド医師からの要請を受けて、緊急に医薬品をイブン・アシール病院に届けることになり、3月に実現しました。現地スタッフが、そのときの報告を送ってくれました（次ページ）。

決して「ISの方がよかった」と、モスルの人々に思わせてはいけなと思います。ぜひ皆様の温かいご支援で、モスルを復興させましょう。

モスル緊急支援にご協力をお願いします!

郵便振替口座 00540-2-94945

加入者名 日本イラク医療ネット

備考欄に「モスル緊急支援」とご記入下さい。

緊急報告！ JIM-NET 現地スタッフがモスルを訪問しました

3月13日、イブン・アシール病院の要請を受け、現地スタッフが約100万円分の医薬品をモスルに届けました（写真）。

【スタッフからの報告】

朝6時半にイブン・アシール病院のタウフィーク院長とアルビルで待ち合わせました。アルビルからモスルに到着するまでは、激しく攻撃され破壊された街並みが続きましたが、いったんモスル市内に入ると、ピンポイントで空爆された建物が点在している程度で、修復作業などが始まって活気がありました。

イブン・アシール病院の焼け焦げた病棟は、3月3日から業者が修復に取り掛かってはいましたが、煤を削るくらいしか進んでいません。機材はほとんど壊されてしまい、焦げ臭いにおいが漂っていました。バシーン！という爆発音が何度も聞こえました。「大丈夫、西側にいるISに向かってロケット弾を撃ち込んでいるので、こっちには飛んでこないですよ」と医者が説明してくれましたが、やはり緊張します。

がん患者たちは、別の事務所の建物で抗がん剤治療を受けていました。建物に入っていくと階段の踊り場が処置室になっていました。まだ入院患者は受け入れておらず、通いで投薬に来ています。モスルの患者はアルビルのナナカリ病院に来ていましたが、モスルで治療が受けられると聞き、イブン・アシー

ル病院に戻ってきていました。

ナナカリ病院に来ていた患者さんが4人くらいいました。中の1人は、「私は、あなたたちにアルビルで4回も会ったのに何もしてくれなかったじゃないか」と怒鳴ってきました。「ごめんなさい」。

私たち JIM-NET は、個人支援をしているのではなく、病院に薬を届けるのが仕事なんです。今日こうして、日本の皆さんの温かい支援のおかげで、100万円分の薬を持ってきました」と説明すると、納得されたようでした。

しかし、新人スタッフのアーデル（写真中央）は、叱られたことで落ち込んでいました。

できなかったことを悔やむより、少しでもできたことを喜んで続けていこうと、みんなで励まし合っています。



ヨルダン事務所から

シリア難民・ヨルダン人障害者のエンパワーメント活動

～社会を変える力に～

福田直美（JIM-NET ヨルダン事務所長）

JIM-NET はヨルダン北部のイルビッドで、シリア難民・ヨルダン人障害者のエンパワーメント活動を行っています。

2016年は、障害者スポーツ、子どものサマークラブ、女性障害者の編み物教室が実施されました。

編み物教室においては、最後に参加者から「今までは支援される側だったから、今度は自分たちが何かをしたい」という声が上ががり、シリア難民孤児やヨルダンの障害児へ自分たちが製作した帽子とマフラーのセットをプレゼントしました。外に出る勇気が出る、悩みを話せる仲間を作り助け合うことができる、自信を持つ、というステップを踏んだ彼女たちはさらに、他の人の役に立つ、という目標を設定し達成したのです。

そして2017年、彼女たちはさらに大きなステップを踏むことになりました。それは、「社会を変える」ことです。ヨルダンにおいて、障害に対する社会の理解は十分であるとは言えません。社会のシステムが整っていないだけでなく、障害者が人々から差別されることもあれば逆に「かわいそうだから優しくしましょう」という意識を持って障害者と接する人も多いそうです。

ヨルダン人のサファさん（車椅子使用者）は、「私たちにも皆と同じように権利があります。特別扱いして欲しいわけではありません。それを社会が知る必要があるのです」と言います。障害者が生きやすい社会になるよう、彼女たちが計画したのは、障害



活動に参加した女性たち。

のを知るための人形劇やカードゲームなどを手作りし、市民団体や学校などに行って障害の啓発運動を行うという活動です。また、彼女たちが実際に経験した話を元に、ローカルラジオでスピーチを行う、という案も出されました。

「障害は個人ではなく社会にある」という原点に取り組んで行く彼女たちの挑戦は、これからです。

※本事業は「連合・愛のカンパ」より、ご支援をいただいています。

聞きたかった戦争・紛争の「リアルな話」

ベテランズ・フォー・ピース（VFP: 平和を求める元軍人の会）のマイク・ヘインズさんとローリー・ファニングさんが、『安保法制に反対する海外在住者・関係者の会（OVERSEAs）』の招きで米国から来日し、2016年11月15日から13日間にわたって全国スピーチツアーを行いました。JIM-NETも11月24日にマイクさんをお招きし、トークイベント「元米兵×元自衛隊員×現 NGO スタッフ 聞きたかった戦争・紛争の『リアルな話』」を青山学院大学にて開催しました。

NGO「APLA」専従スタッフの野川未央さん、元陸上自衛隊レンジャー隊員の井筒高雄さんにもご参加いただき、現場に即した臨場感のあるトークとなりました。

☆マイク・ヘインズさん（ベテランズ・フォー・ピース）

まず、日本の皆さんに広島・長崎への原爆投下、東京大空襲をはじめとする日本各地への米軍の空襲についてお詫びします。それから僕は19歳の時に海兵隊として沖縄に1年間駐留しておりました。その経験も踏まえて、米軍基地の圧力に苦しんでいる沖縄の皆さんに深くお詫び申し上げます。

米国は現在も同時進行で複数の戦争を戦い、米軍基地を世界中に配備しています。それを下から押し上げている力が「米国例外主義」です。多くの米国人が「他の国は米国に追従すべき」だとしています。「米国例外主義」を下から突き上げている力が「愛国主義」です。小さいころからどんどん刷り込まれていきます。戦争ごっこ、武器のおもちゃ。映画でもテレビでも漫画でも戦争をモチーフにしたものが多い。野球やアメフトなどのスポーツイベントは、もろに愛国主義をかき立てるものです。

ほんの2週間前に開催されたサンディエゴの空軍航空ショーでは、戦争を美化したようなアトラクションがたくさん行われ、まるで戦争をモチーフにしたディズニーランドのようです。玩具も売られていて、重装備の兵士の人形の周りに自動小銃がいくつも置いてあって、大きく「フリーダム！」と書かれています。僕も小さいころにこうやって遊んでいました。国のために戦うのは当たり前だと思っていました。

18歳くらいの男の子が入隊を決意するためには、いくつかの要件が必要です。まず、軍のリクルーターが学校にやってきます。そして、ここで断るのは難しいというくらいに、説得されてしまう。テレビでの軍のコマーシャルがまたかっこいいんですよ。米軍は、7億ドルというすごい金額を宣伝費に使っています。

僕はいわゆる「バイブル・ベルト」と呼ばれているジョージア州の出身で、教会と軍との関係は非常に強い。また、貧困で軍に入隊するしか将来のない子もたくさんいます。経済的徴兵という言葉もあります。加えて9.11のあと愛国心に燃えて入隊した人も、ものすごく増えました。

僕は海兵隊に入って、精鋭部隊の一員にまで上り詰めました。2003年にはイラク・バグダッドに赴任しました。私の部隊はバグダッドに行った最初の部隊で、精力的に動き、この頃は1日2回から3回襲撃していました。戦闘においては、相手を非人間化しなければいけないんです。そのために重要なことは、人種差別主義の投入です。例えば私たちは、イラク現地の人たちを「タオル・ヘッド」とか「野蛮人」とか差別的に呼んでいました。

襲撃の命令を下すのは上官ですが、彼らが集めた情報の6割は嘘でした。まず、これから襲撃する家の前で車から降り、銃を構え、ドアに爆発物を仕掛けます。爆発すると、中に突入しま

す。一般家庭の食事中、いきなり爆発が起きて、重装備の兵士がどっと入っていく。今でも覚えているのは、年配の女性を壁に押し付けて尋問したことです。そのときに聞こえた小さな女の子の叫び声が、耳について離れない。今でも聞こえてきます。

襲撃した家に従軍可能な若い男性がいると、連行して尋問する。連行された若い人たちのうち、無事に家に帰れた人はほとんどいないと思います。こんなことを毎日やっている。いつも死があり、破壊がある。そういう環境に身を置いているうちに、だんだん自分の中の人間性が失われていくのを感じました。イラクには「テロリストと闘ってこい」という命令で行ったわけですが、気がつけば、自分がやっていたこと自体がテロ行為ではないかと、実感し始めたんです。

軍産複合体が戦争とからみあって、巨費を得ている。軍と企業との密接な関係を続けていくために、政府は多額の国防費を出し続けなければならないのです。米国の自由裁量予算（各省庁に割り当てられる予算・国会審議を通す）の中の、なんと54%は国防費です。教育費の10倍です。

※国防省は米国で最大の省庁で、二番目が退役軍人省（6%）。

戦争から帰ってきて、周りとうまくいかず、自分の殻に閉じこもってとても辛かった。孤独の中から抜け出すのに、とても役に立ったのは農業、もう一つは行動することです。2015年11月にはベテランズ・フォー・ピースのメンバーと一緒に沖縄の辺野古へ行き、建設資材を積んだトラックを阻止しました。2か月前には沖縄の高江で抗議活動をしました。オスプレイの発着場が素晴らしい熱帯雨林の森に作られようとしているのを阻止するためです。機動隊の人と話す機会もあったのですが、沖縄に行ってこの仕事をするのが一番辛いと言っていました。

日本国憲法9条の拡大解釈には、悪い予感がします。今、自衛隊が南スーダンに、停戦協定が成立していない状態なのに派遣されています。これはPKO5項目の一つに明らかに違反しています。僕の経験から言って、これは必ず流血事件に発展すると思います。日本のリーダーは、戦闘になったときに誰が味方で誰が敵か見分けられると言っているようですが、実際の経験から言えば、それは無理です。本当にそのような状況になったときは、自衛隊員が自衛隊員を撃ってしまう可能性もあるわけです。また、犠牲者が軍人ではなく一般市民ということもありうる。現在米国が闘っている戦争の犠牲者は8割から9割が一般市民です。

今の世の中は大変酷い状況ですが、今頑張れば、平和に向けて何か新しいことができると信じています。今日は小学校を2か所訪問しました。大人の皆さんは、子どもたちに既成概念にとらわれない考え方をするように、と言ってあげてください。

☆野川未央さん (APLA) :

私の働いている APLA は、主にフィリピン、インドネシア、東ティモールで小規模農民の地域自立支援をしている NGO です。東ティモールは 25 年間インドネシアに占領されて、当時 60 万人の人口のうち 20 万人が亡くなっています。国際的に違法な占領をしていたインドネシアに対して、国連の安保理で 8 年間にわたり毎年反対決議が出ていたのに、唯一支持したのが日本政府でした。多額の税金 (ODA) で開発援助をして、インドネシアの独裁政権を支えていたんです。主権回復し、平和になった東ティモールに仕事で通うようになり、日本の過去の過ちに対する責任を深く考えるようになりました。

そういう経験を経て、沖縄の米軍基地の問題と出会いました。いま日本政府が向かおうとしている方向、過重に沖縄に押し付けられている米軍基地の問題、それがすべて一つにつながって、沖縄の米軍基地問題は自分自身の問題だと捉えられるようになりました。2013 年に初めて高江に足を運び、今では休みがまとまって取れると辺野古や高江に通っています。自分自身の体験を踏まえて、マイクさんにお聞きしたいことが 2 つあります。

20 年前に沖縄のキャンプ・フォスターにいて、去年は抑圧される側の沖縄の人々と共に座り込んで、どういうふうに感じましたか？

マイク：海兵隊員として沖縄に行ったときの情報は、全部上官から得たもので「自分たち海兵隊は沖縄の人々を守るために沖縄にいるんだ」と教えられていました。去年の 11 月と今年の 9 月、今度はアクティビストとして沖縄に行ったわけですが、この短い期間 (2 週間) は、海兵隊員として 1 年間沖縄にいた期間と比べると、もっと凝縮した情報を、現地の人と直接話さず中で得ることができました。第二次世界大戦前までの沖縄の歴史も学ぶことができました。

野川：この間沖縄に大阪府警から送られてきた機動隊員が、阻止行動に参加している市民に対して「土人」「シナ人」と侮蔑的な言葉を使いました。機動隊員は、マイクさんが海兵隊員として派遣されたときのように、命令されたことだけをしていると思うんです。彼らに、どういう言葉をかけたらいいと思われませんか？

マイク：現地の人たちの思いを機動隊員に何とかして伝えようとする努力が素晴らしいと思います。相手に向かって怒鳴りつけて「お前のやってることは違うだろ！」と言ったら、バリアを作ってしまうよね。あのような状況で相手方に伝えるためにはどういう方法がいいのか、模索しながらやっていきましょう。



マイクさん

野川さん

井筒さん

☆井筒高雄さん (元陸上自衛隊レンジャー隊員)

今、陸上自衛隊は約 14 万人いますが、その中でレンジャー隊員は 5100 名とされています。95% の自衛隊員は「レンジャーに行きたくない、実弾での訓練なんかしたくない」という人たちです。こういう自衛官が、これから南スーダンで戦闘任務につくということが、今の自衛隊の現状です。

私は 1992 年 PKO 法案が通った時、自衛隊を依願退職しました。あれから四半世紀くらいになりますけれども、日本は何も変わっていないと思います。まず、自衛官は公務員なので、憲法 9 条を守る義務があります。ところが、自衛隊は海外で平和維持活動とか後方支援とかをする立場にもなりました。PKO っていうと「国連平和維持活動」というイメージだと思いますが、今の PKO のルールでは、交戦規程を認めています。紛争当事者になって、政府軍でも警察でも攻撃対象にしてい、住民を保護するには先制攻撃もしてい、というのが南スーダン PKO でのロジックです。

7 月には南スーダンの首都ジュバでもついに戦闘状態になりました。そのときには PKO に向かって政府軍も攻撃し、警察も保護を求めてきた住民に対して攻撃しました。南スーダンに自衛隊を派遣する以上、こういう現実を知っておかなければいけないと思います。

今日のお話を聞いていると、これからの日本の未来のような気がしたんですけれども、そういう戦争にコミットしてしまうことの怖さ、リスク等について付け加えることがあれば、お聞きしたいと存じます。

マイク：一番のリスクは、自衛隊員が最初に南スーダンで一発撃って、それが敵に当たったその瞬間です。日本が今まで 72 年間、ずっと築いてきた平和が、その時点で音を立てて崩れ去ってしまいます。その瞬間から先は、もっとたくさんの流血事件に発展すると思います。戦争には必ず「予期せぬ結果」がついてきます。イラク戦争の場合は、戦争を始めた当時、今のような IS なんてものが誕生することなど誰も予想してなかった。

なぜ自衛隊がわざわざ南スーダンに行くのか、理由がまったく見えません。最近 350 人の自衛隊が派遣されて、それは現地邦人を守るためということですが、現地邦人は 20 人で、それはほとんど国連職員ということですよ。20 人を守るために 350 人連れて行くなれば、先に 20 人を避難させればいいだけです。

井筒：今回の南スーダンへの派遣の裏の目的は、日本製の武器を実戦で使って、信頼を得て武器の売りさばきをしたいのだと思います。すでに日本は防衛装備移転三原則という法律によって武器の輸出は解禁になり、これからは米国の真似をして軍需産業が拡大していくのではないかと思います。いかがでしょうか。

マイク：戦争するにあたって「利益追求」が重要になります。企業と軍との結びつきを制することによって、自国の企業にもっと利益をもたらすことができる。そういうことはずっと米国がやってきたことですから、全くその通りだと思います。

皆さんは素晴らしい憲法 9 条を守ってください。日本は 70 年以上も戦争をしなかったのですから、平和への提言をするのは日本の皆さんこそふさわしいと思います。

(構成：JIM-NET 便り編集部)

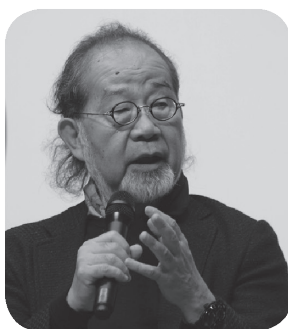
光を世界へ

～ 2017 チョコ募金キックオフ チャリティトーク&コンサート～

2016年11月19日、南大塚ホールにて「2017 チョコ募金キックオフ チャリティトーク&コンサート 光を世界へ」を開催しました。
企画の段階から関わって頂いたウオン・ウィンツァンさん（ピアニスト・作曲家）に、当日のご報告をいただきました。

昨年11月19日に行われた、JIM-NET チョコ募金キックオフイベント「光を世界へ」は本当に凄いイベントでした。ゴージャスな出演者！ 齊藤とも子さんの司会と素敵な朗読！ 湯川れい子さんと鎌田實さん、佐藤真紀さんの深いお話！ パワフルでスピリチュアルなシンガーたち。本当に完璧なステージでした。私の作詞作曲の「光を世界へ」を皆さんで合唱してくださった最後の盛り上がりは、半端ないもので、私の音楽人生の中でも特筆すべき物があります。ほんとうに感謝です。

何より凄かったのは、このステージのプログラムが、前日までほとんど決まっていなかったということです。いや、全てが決まったのは始まる直前だったという綱渡りをご存知なのは、スタッフだけでしょうね。スクリーンに映し出された映像もリハーサル中にはまだ出来ていなかった。でも、誰もそのことへの不安を持っていなかった。いや、いたかな？ すべて宇宙のご意志、計らいで私たちは生きている。予定外のこともなんか何も起きていない。そのことを身をもって体現したイベントでした。JIM-NET はすごい！ スタッフも凄い！ また皆さんにお会い出来るのを楽しみにしています。ありがとう！



左からウオンさん、上段：鎌田實（JIM-NET 代表理事）、湯川れい子さん（音楽評論家・作詞家）、齊藤とも子さん（女優）。

下段：Indiv Notes、ゴスペルスパークルの皆さんのご協力を得て、フィナーレに登壇者全員で「光を世界へ」を大合唱しました。

イラク・シリアの子どもたちへ バレンタイン展@ギャラリー日比谷

2月10日から15日まで東京・ギャラリー日比谷で『イラク・シリアの子どもたちへ バレンタイン展』を開催、盛況のうちに幕を閉じることができました。鎌田實代表の『がんばらない』トークへのお申し込みが多く、当初の予定を増やして午後14時と15時半の2回に分けて行われました。初回の会場には、歌手・山崎ハコさんがギターを片手にご登場！ 満席のギャラリーに響いたハコさんの唄声は、来場者の皆様の心に熱く届いたようです。

ギャラリーの入口には、チョコ缶の原画をはじめ、札幌のJIM-NET 支援者様によるキルト、フラワーデザイナーの吉岡美佐子さんが作られたアートフラワーも展示販売され、明るい空気に包まれました。物販コーナーは、関西のジュエリーデザイナー・安田ゆきさんが手掛けたアクセサリーや「羊ぐるぐるワークショップ」でもお馴染みの百子先生のフェルトワーク作品も含め、事前にイベントチームが用意した様々なグッズのお披露目の場となり、楽しみながら購入アイテムを選ばれる方々の対応に追われました。



1月に佐藤事務局長がイラクから抱えて帰国したヤジディ教徒の少女・マリヤムさんのエネルギー溢れる作品群を2階に展示（写真）。筑波学院大学が昨年の難民映画祭で取り組んだプロジェクション・マッピング『反戦と反線』もご紹介したので、展示内容が濃いフロアとなりました。年に一度の展示会を都内の中心地で開催させてくださるギャラリー日比谷の福石茂雄オーナーと福石薫さんも、笑顔でナビゲーターを務めてくださいました。この場をお借りして、ご協力・ご来場くださった皆さまに感謝申し上げます。（JIM-NET イベント担当：崔麻里）

荒れ地に花をさす

鎌仲ひとみ（映像作家・JIM-NET 理事）

2011年3月11日のあの事故から6年が経ちました。怒濤のような時間が流れて、あんなにも多くの事が起きたのにあっという間だと感じてしまいます。当時1歳だった子どもが小学校に入学するような時間が経ち、確かに変化したものも多いけれど、依然として同じ問題が解決されず、問われ続けています。

夏目漱石の「草枕」の冒頭は「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい」と始まっています。

「小さき声のカノン」を4年かけて完成し、この2年上映に取り組んできましたが、この漱石の言葉が時折胸に浮かんできました。原発事故という途方もない人災に巻き込まれた普通の人々がどうやって新たな事態、現実を生きていくか、と自分自身も含めて試され続けてきたこの間、放射能汚染のリスクを語れば角が立ち、被災者に寄り添えば、お上のいう安全論に流される、放射線リスクの原則を尊重すればどんどん窮屈になっていく。ああ、夏目漱石は実にこの世をうまく言い表しているなあ。

それでも、私は結局、最後には「いのちの花」を咲かせたいという思いが残ると感じてきました。「小さき声のカノン」はその思いを普遍的に共有したいと、作った作品です。厳しい放射能の風に吹かれながら、それでも生きる事を選択していく、その営

みを心から「よし」としたいのです。あたりまえのように。それが「荒れ地に花をさす」ようにみえたとしても。

『小さき声のカノン』DVD 発売にともない、 上映料金が変わりました！

最低料金 30,000 円から上映会ができるようになりました。

ぜひ、小さな上映会を企画してみてください。

◎詳細は下記サイトをご参照ください。

<http://shop.kamanaka.com/>



ベラルーシの子どもたちは保養に出かける前に内部被ばく量を検査します。保養後はその数値が劇的に改善します。

シリア和平ネットワーク ワークショップ・シンポジウム「シリア危機の実効的アプローチに向けて」報告

シリアに平和をもたらすために

内海旬子（JIM-NET 海外事業担当・アドボカシー担当）

JIM-NET が事務局を担う「シリア和平ネットワーク」は、構成 NGO と東京外国語大学の青山弘之教授を中心とする研究グループ、明治学院大学国際平和研究所の共催で、シリア人を日本に招聘し、今シリアで起こっていること、近い将来に NGO や研究者は和平に向けて何ができるかを具体的に話し合う機会を持った。

バイルートを拠点とするシリア人の研究機関「シリア政策調



バイルート在住のザキ研究員（左）とダマスカス在住のナビール博士。奥は東京外国語大学の青山教授

査センター（SCPR）」からの研究者2名（Nabil Marzouk 氏 経済研究員（専門：経済政策と分析）Zaki Mehchy 氏 共同設立者・研究員（専門：国際経済））は2月9日から14日まで日本に滞在し、ほとんどの時間を私たちと共にした。2月10日から11日の午前中の非公開ワークショップ、2月11日午後の公開シンポジウムには、加えて、別件で来日中だったユニセフ中東事務所、UNDP シリア事務所からシリア人スタッフ、ダマスカスのシリア世論調査研究センターから3人がスカイプで参加し、今のシリアに関する報告を受け、日本人参加者との話し合いを行った。別途 SCPR の2人は、外務省、JICA、国会議員と面談し、シリア和平の重要性を訴えた。

今回の招聘を踏まえ、シリア和平ネットワークは、①和平に向けては、シリアの事情にあわせたアプローチをとること、②中心となるのはシリア市民であること、③シリア国内外の市民団体と対話の機会をこれからも重ねていくこと、④国内においては、政府および関係機関との情報 / 意見交換を続けていくこと、の重要性を再認識し、今後の活動につなげる決意をした。引き続き支援をお願いしたい。

鎌田代表のつぶやき～「遊行、という生き方」

人生は、ときどき生きるのが辛くなったり、苦しくなったりすることがある。

どうしたら、生きるのがラクになるのか、考えてみた。『遊行を生きる』(清流出版)という本を、出版した。1年半かかって、本格的な本を書いた。

古代インドの聖人は、人生を4つの時期に区切った。「四住期(しじゅうき)」と言われている。「学生期(がくしょうき)」は、生まれてきた命が学び、成長する時期のこと。「家住期(かじゅうき)」は人間として成熟していく時期。家族をつくったり、家を建てたり、人によっては起業したり、いちばん汗をかくときでもある。「林住期(りんじゅうき)」は、定年などして一段落したとき、林に隠棲しながら、生きるとは何か、人間とは何かと思索を求める時期。そして、「遊行期(ゆぎょうき)」は、人生のしめくくりの時期といわれている。人によっては解脱(げだつ)、煩惱から自由になることを目標にする時期だという。

ぼくは、未だ煩惱から自由になっていないが、勝手に文字どおり「遊び、行く」時期だと考えた。この時期こそ自分が好きな仕事、やりたいことをする。自分自身を先鋭化する時期と、勝手に解釈したのだ。そして、「人生の晩年」の方だけが遊行するだけではなく、若い人から年寄りまで、みんなが「遊行」のテイストを持ったら、この世の中はもっと面白くなると思ったのだ。

歴史学者のヨハン・ホイジンガは「ホモ・サピエンス」をもじって「ホモ・ルーデンス」と言った。「遊ぶ人」という意味である。ぼくたちは「遊ぶイキモノ」なのだ。人は遊びながら、より自由を目指していくのだ。

昨年末、イラクの難民キャンプに行った。また2月の末から行く。気持ちは「遊行」をしている思いだ。

自由律俳句の種田山頭火が、こんなことを詠っている。「また一枚 脱ぎ捨てる 旅から旅」大好きな句だ。

山頭火は旅をしながら、何を脱ぎ捨てていったのだろうか。しがらみかもしれない。執着かもしれない。捨てていい執着は捨て、捨ててはいけない執着をエネルギーにして、僕は自由を目指していこうという決意で、『遊行を生きる』という本を書いた。

人生は一回だけ。いまは内に閉じこもる「林住」の時期ではなく、自由に外に向かってはじける「遊行」の時代なのだと思う。これが『遊行を生きる』を書いた理由だ。

よかったら、読んでみてください。(2017.2.20 記)



(清流出版刊 定価 1000 円+税)

JBPress 2 月 15 日より連載スタート！鎌田實のヌーベルバーグ

ヌーベルバーグとは、新しい波です。鎌田實と関係している若い人たちが、新しい波を起こしていく。そんな連載企画です。どなたでも無料で読み頂けます。毎週水曜日 配信。ぜひご覧ください。

<http://jbpress.ismedia.jp/category/mkamata>

❖新人あいさつ

アッサラームアレイコム！ 1 月より JIM-NET アルビル事務所に赴任しました斉藤亮平です。青年海外協力隊員としてシリアで音楽教育普及活動、その後はヨルダンにてシリア難民を対象に音楽や美術を通して子どもたちのケアに従事しました。



イラクでは、がんの子どもたちやその家族を対象に「JIM-NET ハウス」を開設し、患者やその家族の支援を行っています。艱難辛苦の中にある彼らの状況を日本に伝え、また日本からの温かいご声援、ご支援も彼らに届けていきたいと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

(JIM-NET アルビル事務所駐在)

♡ JIM-NET 募金グッズ新作登場

JIM-NET 募金グッズの中でも人気が高い「今治タオルハンカチ」。白血病を克服したイラクの少女・ハウラが描いた赤い花のワンポイント刺繍(色: オフホワイト・チョコ)に加えて、新作「黄色いチューリップ」柄がお目見えしました。刺繍のチューリップは、2017 チョコ募金の黄色い缶の柄を使用しました。描いたのはイマーン(11 歳)。イラクからドイツに逃れた難民で、白血病の闘病中です。タオルの色はグレー、大きさは 25 センチ角です。

新年度のちょっとしたプレゼントにも最適！ぜひ、お申し込みください。

(1 枚 750 円 送料別)

※お申し込みは電話またはメールでお願いします。



2017 チョコ募金は、多くの皆様のご協力をいただき、終了いたしました。

いただいた募金は、イラク小児がん支援、緊急支援(シリア難民・イラク国内避難民)、福島の子どもたちを放射能から守る活動に使わせていただきます。ありがとうございました。

特定非営利活動法人 日本イラク医療支援ネットワーク(JIM-NET)

電話/FAX 03-6228-0746 メール info-jim@jim-net.net URL <http://jim-net.org>

Facebook <https://www.facebook.com/JapanIraqMedicalNetwork> Twitter https://twitter.com/jim_net

